

これからの幼稚園教育

河野 重男

一 幼稚園教育要領改善の基本方向

新しい幼稚園教育要領の作成にあたって、その基本方向は、いうまでもなく、昨年十二月に発表された教育課程審議会の答申に明確に示されている。

まず、幼稚園教育の基本として、次の四点を打ち出している。

ア 幼児の主体的な生活を中心に展開されるものであること

イ 遊びを通しての総合的な指導が重要であること

ウ 幼児一人一人の発達の特性及び個人差に応じた教育を行うことが大切であること

エ 幼児が自発的にかかわることができるような人的・物的な環境の構成が大切であること

この四点を幼稚園教育の基本としておさえるということになると、これは現行の教育要領を支えている理念とまさしく共通しているということになる。そのことを原点として確認したうえで、たとえば「遊びを通しての総

合的指導とは何か」ということが必ずしも実践の場で正しく受け取られて実践されているとはいえない実態があることをふまえ、さらに社会や教育環境の変化の中で、その意味を新しく問い直しているものととらえることができる。だいじである。

答申では、こうした幼稚園教育の基本に立って、とくに「ねらい」及び「内容」について次の事項が全体を通じて十分達成できるように配慮して改善することとしている。

ア 人とのかわりをもつ力を育成すること

イ 自然との触れ合いや身近な環境とのかわりを深めること

ウ 基本的な生活習慣や態度を育成すること

この三つの配慮事項について考えるとき、それをいつも「何のためか」という本質的な問いに立ち返ってとらえることがだいじである。たとえば、「基本的な生活習慣や態度の育成」ということについてである。

基本的な生活習慣の確立といえ、とかく「しつけ」の

問題というように狭くとらえられがちであるが、それを広く、「何のための基本的な生活習慣か」という視点からとらえ、位置づけることが必要である。そして、このことについては、答申の中で、極めて明快に指摘されている。

「幼稚園生活における具体的、自発的な活動を通じ、健康で安全な生活の基盤となる基本的な習慣や態度を育てるとともに、社会生活や様々な事象に対する積極的な関心、物事に取り組む意欲、道徳性の芽生え等を培い、自立への基礎を養う。」

ここには、幼稚園教育における基本的な生活習慣の性格づけは、まさしく「健康で豊かな生活の基盤」としてであり、また「自立への基礎を養う」ものとしてとらえられて求められていると考えられるのである。したがって、この視点は、ひとり幼稚園教育の段階だけでなく、小・中学校の段階における基本的な生活習慣の性格づけについても貫徹されなければならないものといえる。

二 自己教育力の育成と幼稚園教育

以上みてきた幼稚園教育要領改善の基本方向は、最近の教育課題として強調されている「自己教育力の育成」という視点につながっている。周知のように、昭和五十八年に出された中央教育審議会の「審議経過報告」では、これからの教育改善における自己教育力育成の重要性を謳い、それを、「学習への意欲と意志」「学習の仕方」の習得」「生き方の探求」を内包する視点としてとらえている。これは、まさに「自立への基礎」なのである。

この場合、たとえば基本的生活習慣の形成ということについても、新しい視点からとらえることが必要になる。基本的生活習慣ということばは、とかく「きまりを守る」とか「箸が使える」というように狭くとらえられがちだが、もっと広義に学習の態度ともいべきものを含んでいることがだいじだと思う。つまり何事にも積極的な関心と好奇心を持ってそれを学習しようとする旺盛

な意欲と、それを最後まで追求していったりやり遂げようとする強固な意志と気力を持つことを基本的生活習慣として大切にすることなのである。

ここで、倉橋惣三が、既に大正十二年頃に幼児教育について次のように主張していたことが想起される。

倉橋は、現代社会は、何よりも「神経が健全で強健な子ども、困難に打ち勝って疲れず、所信と使命を実行し得る人間」を必要としていると喝破していた。そのために、戸外保育の重視、自然の教育力の活用、机からの解放、小さな手仕事から大筋肉を働かせていく方向への解法の転換、幼稚園生活のスケールを大きくしていくことなどを主張し、大規模なものを製作、構築する主題に教師と子どもが、ともに全身全霊を挙げて没頭することによって達成される「精進感」を重視していた。

倉橋のいう「自由感と精進感の統一」は、まさに自己教育力の育成を志向する視点だといえるし、これが「自立への基礎」だといえると思うのである。

(お茶の水女子大学)